

東山動植物園再生プラン

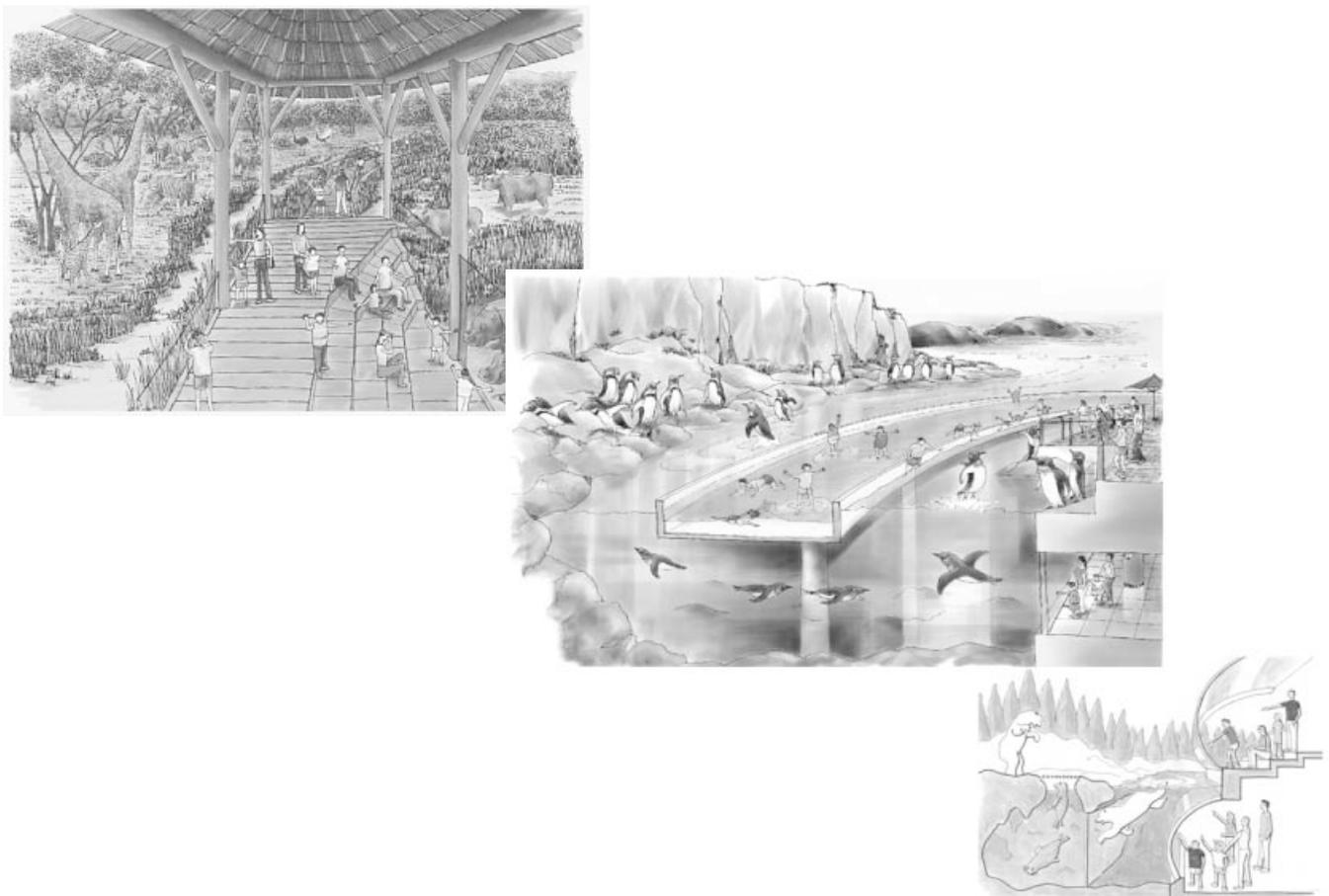
—生まれ変わる東山動植物園—

社団法人中部開発センター

企画事業部 折戸厚子

名古屋市の東部、東山の森にある東山動植物園は、全国トップクラスの動植物展示数を誇る日本有数の総合公園である。年間入場者数についても、長らく、上野動物園に次ぐ全国第2位の座にあったが、近年、動物の「行動展示」で脚光をあびた北海道の旭山動物園の躍進により、全国3位の座に退いている。

折しも、環境の世紀といわれる21世紀を迎え、動植物園の役割も、世界各地の動植物を見せるレクリエーションの場から、生物多様性を保全するための環境教育の場へと変化し、それにあわせて展示方法も世界的に革新されつつある。長い歴史を誇る東山動植物園も施設、コンセプトを新しくする必要があり、名古屋市は「東山動植物園再生プラン」を策定、今後10年かけて、全面改装する計画へと動きだした。



基本計画イメージ図「アフリカのサバンナ」「北極から南極の海」

東山動植物園の歴史

東山動植物園の起源は、明治23年（1890年）に中区前津町で公開された「浪越教育動物園」といわれ、その後、市立動物園となって鶴舞公園に移り、昭和12年（1937年）、現在の地に、植物園、動物園を包含した一大公園「東山公園」として開園した。名古屋の動物園としての歴史をたどれば、実に100年以上の歴史を誇る。

当時、最新鋭の展示様式だった檻を使わない無柵式放養形式をライオン獣舎、ホッキョクグマ獣舎に、日本で初めて取り入れるなど、きわめて斬新な施設で、第二次大戦前には、ゾウ・キリン・ライオン・トラなど1000点近い動物数を誇る「東洋一の動物園」と称された。

また、イギリス・キューガーデンの「パームハウス」を模したといわれる植物園の温室は、左右対称の美しい姿で「東洋一の水晶宮」と賞賛された。（この温室は、現存する国内最古の温室といわれ、建築技術史上重要な施設として、現在は国の重要文化財に指定されている。）

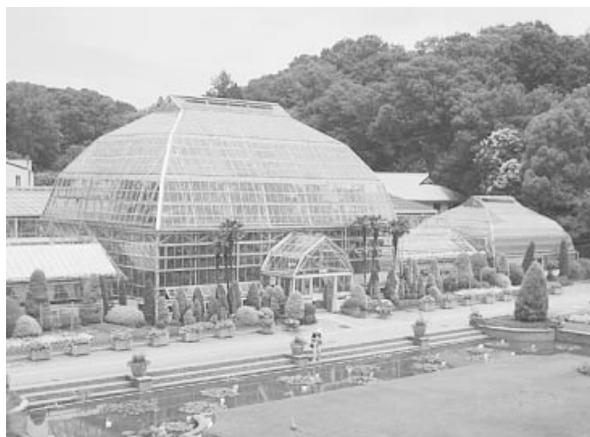
戦中は、食料や燃料不足によって多くの動物が死亡したが、当時の園長などの努力によって、空襲に備えて動物園の猛獣は全て処分という軍の命令にも関わらず、全国でただ一ヶ所、ゾウ2頭を終戦まで生存させた。

戦後、国内で唯一残された“ゾウを見たい”という子供達のために、滋賀、東京、三重、埼玉、千葉などから名古屋までの特別列車「ゾウ列車」が運行され、日本各地から3万人以上もの子どもたちがやってきたことは東山の長い歴史の一挿話として語りつがれている。その後も、子供達を元気づけるためのニコニコサーカス、ゴリラショウなどの企画を続け、全国的な注目を集めた。

昭和38年（1963年）に地下鉄が開通し、時間的に動物園が身近なものとなった。この年の入園者数は、対前年比33%増（185万人から246万人へ）と驚異的に伸びている。昭和44年（1969年）には最高入園者数338万人を記録した。

1984年（昭和59年）には、日本で初めてコアラが来日。コアラ舎には連日の行列ができ、続く昭和60年代は上野動物園とともに、年間300万人台を維持していたが、その後、少子化や余暇の過ごし方の多様化などにより入園者は減少していき、平成17年度（2005年）の愛知万博開催年にはピーク時の約半分の160万人台へと減少した。

こうした入園者数の減少に加えて、世界的に、動植物園の果たすべき役割が変化しているなか、施設だけでなく、コンセプトの古さが目立ってきたとして、同年より、名古屋市は「東山動植物園再生プランづくり」を始めることを公表。また、70周年記念イベントとして、ライオンの運動場の中に入り、ガラス越しに見られる「ワーオチューブ」や、200m大型滑り台を設置。東山動植物園に関する新しい話題を提供した結果、2006年度入園者数は200万人に回復している。



「東洋一の水晶宮」と賞賛された温室



ライオンの運動場の中でガラス越しに見られる「ワーオチューブ」

市民意見をふまえて 東山動植物園再生プランを発表

本年6月、市民意見等を踏まえて基本計画案を修正した「東山動植物園再生プラン基本計画」が発表された。

計画案は、動物の生息地別に展示しアフリカのサバンナなどを再現、植物園の庭園を本格的なイタリア式「歴史庭園」に改修するなど、現在の動植物園のあり方を大胆に造り替える大規模なもので、およそ400～500億円をかけて、開園80周年となる2016年度までの10年間での完成を目指している。

動物、植物単独の展示から「生態系の展示」へ

動・植物園の役割は、かつての世界各地の動植物を収集してきて、来園者に見せるレクリエーションの場から、自然に興味を持ち、考え、自然環境を次世代につなぐための環境行動を促す環境教育の場へと変わってきている。

それにともない展示方法も、檻を用いた展示から、本来の生息地の景観をできるだけ再現した「ランドスケープ・イマージョン」、飼育下にある動物の精神的健康の向上を試みて、本来の行動を引き出す「エンリッチメント」といった考え方が取り入れられるようになっていく。

新しい東山動植物園では、こうした手法を積極的に用い、「動物と植物からなる生態系」を見せる展示にしていく。これは、来園者があたかも動物の生育地に迷い込んだような感覚を「体感」させるゾーンで、従来のように動物を「見る」だけでなく、動物本来の習性や行動を「体感」する生態系の展示となっている。

こうした新しい展示は、「アジアの水辺」「アジアの森」「アフリカのサバンナ」「アフリカの森」「北極から南極の海」の5ゾーンが想定されており、基本計画にあわせて、夢のあるイメージ図が公表されている。

また、市民のための動植物園の基本方針として

- ① 「見るもの」と「見られるもの」の垣根の除去
- ② 稀少動物の「保護」と「増殖」への貢献
- ③ 「娯楽」と「学習」の両立
- ④ 「動物園」と「植物園」の融合
- ⑤ 「東山の森」と「動植物園」の一体的活用
- ⑥ 「市民」と「行政」の協働

の6つが設定されている。

東山の森づくり、周辺のまちづくりを推進

東山動植物園再生プランは単なる改築計画ではなく、東山動植物園の再生を核とした、「なごや東山の森」の森づくりを目指すものであり、さらには、東山動植物園の再生により、にぎわうであろう周辺地区のまちづくりや活性化なども目指している。

「なごや東山の森」は、東山動植物園を含んだ東山公園全体に平和公園をあわせた410haにもおよぶ都市に残された広大な森で、その森づくりの活動内容は、雑木林や湿地などの保全・再生活動や環境学習・体験学習等、多岐にわたって実施していくものである。

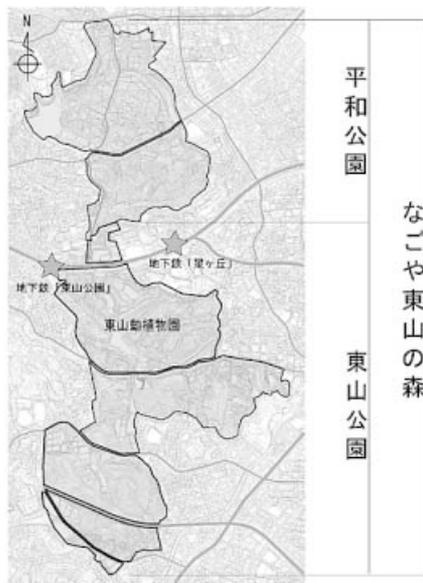
まちづくりに関しては、地下鉄から東山動植物園への入り口となる東山地区、星が丘地区などと連携して行われる。現在、地元への説明、意見交換が始まっている。

今後のスケジュール

今年度中に具体的な基本設計・実施設計を進め、来年度にはいよいよ1期工事の着手となる予定である。

10年の間、東山動植物園は開園しながら、工事が行われていく。すべての展示施設が完成してからいっせいに公開するのではなく、工事が速やかに完了したものから、順次、公開されていく。

新たな展示施設の設置には、設計着手から工事



基本計画対象区域図

東山動植物園の概要

- 施設名
名古屋市東山動植物園
- 所在地
愛知県名古屋市千種区東山元町3-70
- 開園年
動物園 昭和12年3月24日(1937年)
植物園 昭和12年3月3日(1937年)
- 展示動物
合計：552種16,594点(2007年3月31日)
- 展示植物
245科7,057種(2007年3月31日)
- 敷地面積
総面積 59.58ha
動物園 32.21ha 植物園 27.37ha
- 東山動植物園URL
<http://www.higashiyama.city.nagoya.jp/>
- 東山動植物園再生プラン(名古屋市) URL
<http://www.city.nagoya.jp/shisei/jigyoukeikaku/douro/nagoya00028628.html>

工完了まで概ね3～4年程度を要するため、既存施設を活用して改修する展示ゾーンなどが先に姿を現してくると予想される。



全体配置計画図

インタビュー



名古屋市東山総合公園再生推進室長
大井 健司氏

これだけの森がある都市は日本中どこにもない

—東山動植物園再生プランの現在の状況についてお聞かせください。

当初は、動植物園を野生体感型にしていこうという議論から始まりました。それに加えて、有識者による再生検討委員会の中で、東山動植物園の周辺にある410haにもおよぶ「なごや東山の森」が素晴らしいので、これを活かした再生プランにしていきたいという議論が出てきました。

都会の中にこれだけのまとまった森が残っているのは日本中どこにもありません。ニューヨークのセントラルパークよりも広い、都会のオアシスとも言える存在ですが、現在は、雑木林で、よほど山が好きな人以外は誰も立ち入らないといった場所もあり、この状況を変える親しまれる里山づくりをしていこうという話が進められています。

また、再生プラン完成時には、年間350万人ほどの入場者を予想しているので、周辺地区の町づくり、活性化を視野にいれていかなければと考えています。

さらに、2010年に日本で開催される生物多様性条約第10回締約国会議（COP10）の誘致に、愛知県・名古屋市が立候補しているので、誘致成功時

には、そのエクスカージョン（体験型の見学会）の舞台に使えるかという具合に、少しずつプランが広がっている状況です。

—「再生」という名前は意味深ですが…

再生というのは「死にかかっていたもの、死んでいたものが生き返ること」という意味なので、我々、職員としては心外なところもあります(笑)。

現在でも、動物園の動物の種類は日本一、植物園の植物の種類は日本で5番ほどの規模を持つ日本有数の動植物園です。

再生プランという名称が先に出てしまい、組織名にもなってしまったので、そのまま使っているという面が多少ありますが、これまでの素晴らしい歴史を活かしたうえで、新たな動物園として生まれ変わっていきます。

動物園は税金によって支えられている

—計画完了時には、年間350万人の入場者を予想とのことですが、工事中も入場者数は増えていくのでしょうか？

昨年200万人が入場したので、今年は220万人を目標にしたいと思っています。徐々に施設が新しくなっていくので、入場者数も右肩上がりになっていき、お客様や職員の意識を上向きにしていきたいです。

公立動物園は、入場料だけでまかなえるものではなく、例えば、年間入場者数がトップになった旭山動物園でも、 やっと赤字が無くなるくらいで、利益はほとんど出ません。通常、水族館は2,000円ほどの入場料なのに対して、動物園は500円ほどということからおわかりいただけるかと思いますが、公立動物園は、運営の多くを税金によって支えられています。

それは、社会教育の一環という位置づけが強いものだからです。博物館相当施設であり、さらには動植物の種の保存という、生物多様性に関する国家戦略の中心的役割を担っているという意識もあります。

ところが、動物園が存在することで環境教育に効果があったとか、生物多様性につながったなどというのは、数字にするのは難しいものです。動物園が評価される指標としては、入場者の数が誰にでもわかりやすく、よく使われます。

これは日本に限りません。アメリカの動物園関係者に財政当局がどのように行政評価をしているのですかという質問をしたら、やはり入場者数が判断基準になりやすいという答えでした。

今回の再生プランは、他都市の例を参考に、最終的に400~500億の事業費がかかると予想されています。新しい施設をつくり、お客様に感動を与え、これならまた新しい施設のために税金を使ってもいいと思ってもらえるか、毎年、試験を受けていくようなものです。

お客様が動物園に来ることによって、生物の多様性の保全に関心を持つようになり、環境に優しい行動をとっていただける動物園になるという志を高く持ちながら、徐々に入場者を増やしていきたいです。逆にいえば、質の高い動物園を作れば、結果として、お客様が増えていくと考えています。

動物、植物どちらの専門家もいる 東山ならではの展示

—新しい展示ゾーンについてお聞かせください。

現在は、動物園では動物を、植物園では植物を見せる形になっています。しかし、実際の自然は、動物と植物から成っていて、どちらか一方で生きているものではありません。

今回の改築は、この重なる部分を見せていくことに力を入れていきます。動物と植物からなる生態系を楽しみながら体感していただくことで、環境行動をうながし、生物多様性の保全につなげていきたい。「環境首都なごや」を目指すための拠点となっていきます。

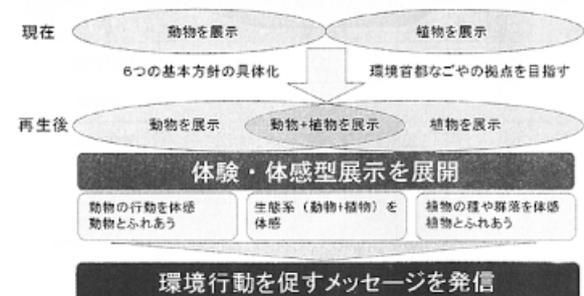
言い方を変えると、これまでの動物園は動物の形を見せていました。百科事典のように、ライオンはこんな形と見せるのが目的ですから、檻の中に、雄と雌が一匹ずつ入っていれば良かったので

す。ところが、今は、インターネットやテレビがあり、動物園で動物の形を見るというニーズは減っています。

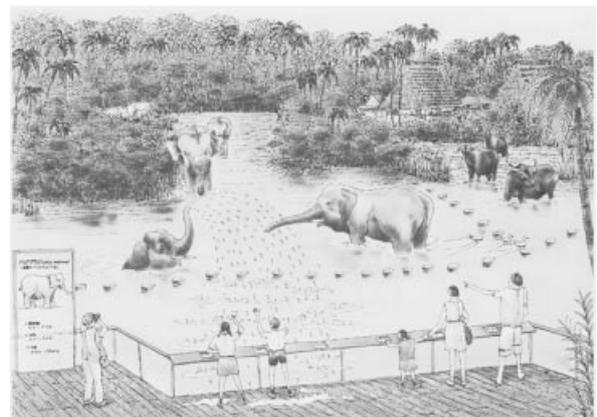
そこで、世界的に、これからの動物園にふさわしい展示というものが模索されていて、例えば、旭山動物園は、動物の行動を見せることに挑戦して、人々の動物園への関心を呼び戻しました。

当園は、それをもう一歩進めて、動物と植物の生態、すなわち動物と植物からなる暮らしを見せようと考えています。例えば、第1期工事では「アジアの水辺」を作りたいと考えていますが、今までのように、獣舎の中のゾウを見せるのではなく、インド北東部の湿地の景観を再現して、その中にはゾウだけでなく、水牛や、サイがいて、さらに現地の人々と、どのような関わりを持って、生活しているのかまでを見せていきたいのです。

ただし、景観を再現するにあたっては、インドの自然をそのまま再現するわけではありません。日本とは温度、湿度が違いますから、大きなドーム



展示概念図



アジアの水辺イメージ図

で囲って、莫大なエネルギーや費用を使わなくては無理です。そんなことをしては「環境首都なごや」の拠点にはふさわしくありません。

ですから、現地のものに似た、日本の気候にあった植物で再現していくこととなります。普通の動物園と違って、植物の専門家もたくさんいるという当園のメリットが大いに活かされるはずです。

従来の役所的ではない計画の進め方

—計画を進めるにあたって苦労している点などありますか？

どんなに立派な計画だったとしても、市民に理解していただき、応援していただければ、実現できません。

そこで、昨年の基本構想の公表、今年の基本計画の公表と、どちらもイメージ図を出しています。実際に設計に入ると、最初のイメージ図とは違が出てくるため、従来の役所の計画の進め方では、詳細な設計まで作ってから、初めてイメージ図を公表します。

今回、先にイメージ図を出してしまうことに対して、反対する意見があったのですが、あえて普通の方法ではない、わかりやすさを優先した進め方をしています。

意見募集についても一工夫

—市民の意見募集方法についてお聞かせください。

基本計画に対して、パブリックコメント（市の原案に対する市民の意見募集）を行いました。市の通常のパブリックコメントでは数10件のご意見が集まる程度なのに対して、本件では624件のご意見をいただきました。

パブリックコメントは、資料を区役所で配り、インターネットで公表し、郵便やファックス、メール等で意見を受けるといった方法をとります。今回は、それに加えて、「夢の動物園」という4分間の映像を作って、園内の動物会館で上映し、そ

の場でも意見を募集するというやり方を行いました。

従来のパブリックコメントが、利害関係がある人の意見に偏りがちなのに対して、普通の方の意見を広く集められたと思います。

幸い、夢のある動物園にする素晴らしい計画である、応援したいという肯定の意見をたくさんいただきました。また、議会でも、基本的に賛成をいただいています。

ただし、まだ基本計画の段階ですから、実際に設計に入れば、また、新たな評価を受けることとなります。ですから、初期の段階でお客様に喜んでいただけるものをつくり、しっかりとした評価を得て、引き続き、応援していただけるようにしていきたいです。

アメリカやヨーロッパなど先進的な動物園を参考に

—参考にする動物園などはありますか？

アメリカやヨーロッパの先進的な動物園、あるいは国内の天王寺動物園や旭山動物園などの改革が進んでいる動物園を参考に勉強しています。ただ、真似をするつもりはありませんから、東山ならではのものを作っていきます。

アメリカでは、「ランドスケープ・イメージジョン（風景に浸し込む）」といった展示方法が主流となっています。これは展示の中に入ると、見学者があたかもアフリカやアジアにいるような気持ちになれる檻や人工物が見えない展示方法です。それは、当園が行おうとしている動物と植物を同時に展示して、生態系を体感してもらうという部分にあたります。こうした展示方法については、現在、アメリカが最も進んでいるので参考にしています。

例えば、日本で人気のある旭山動物園では、コンクリートの床や檻などの人工物が見える中で、動物の行動を引き出そうという「行動展示」に取り組んでいますが、アメリカでは、そういうふうには人工物が見えるよりも、とにかく自然の中にい

るように見えることが評価されるようです。極端な話、シアトルの動物園に行くと、動物園の自然の中に1日いて、2～3種類の動物に出会えば、それで心が癒されるからいいのだという発想のようです。

それに対して、ヨーロッパではアメリカに近い緑に囲まれた自然景観を作りつつ、多少の人工物があってもいいので、動物の行動を引き出そうとしています。当園の目指す方向としては、ヨーロッパに近くなるかなと思っています。

現場の職員の意識改革も必要

—そういった展示方法にはある程度、面積が必要になると思いますが、現在、日本一の動物の種類が減る可能性もあるのでしょうか？

可能性はあります。例えば、現在、ニシキヘビが10種類近くいますが、市民にそういうニーズがあるのかは若干、疑問があります。

動物園を博物館相当施設として、コレクションを充実させようとする、と、たくさんの種類を集めて、長屋形式に檻をつくり、並べてみせるのが効率的です。

しかし、今回の考え方としては、多少、種類が犠牲になるとしても、動物の生態、動物の暮らしを見せていきたい。それから現地の人々と我々の係わり方、つまり、こうした森林を切り開き、植えた作物を日本人が買っていき、そのことで動物が減っているけれど、本当にこのままでいいのだろうか？といったことまで訴えていくのが、「環境首都なごや」の拠点としてふさわしいと思います。

ただし、そういった訴えは難しく感じられると、一般受けしません。前提として、まずお客様が来なくなるような楽しい動物園を作る。しかし、志は高く持っている。こうした専門性、一般性、さらに目的のベストミックスをこれから追及していきたいと思っています。

そのために、今回の改革では、ハードだけではなく、職員の意識を変えていくことが必要だと考

えています。

例えば、日本全国でインドサイは3頭しか生まれていませんが、そのうちの2頭は東山生まれです。同じく、ゴリラはこの10年間、2頭しか生まれていませんが、1頭は東山生まれです。そんなすごい専門家が東山にはいますが、そのすごさは外にうまく伝わっていません。

現場の人間は現場にいればいいという意識ではなく、お客様に伝えてもらいたい。接客の意識、環境教育の意識を持った専門家になってもらうことが、生物の多様性を伝えていくうえで大切だと考えています。

東山の歴史は残していく

—すべて新しい施設になるのでしょうか？

残していきたいものもあります。たとえば、ライオン獣舎と堀は、ドイツのハーゲンバック氏が開発した「檻のない放し飼い方式」を日本で初めて採用した歴史あるものですし、国の重要文化財にも指定されている植物園の温室があります。

それから、今回、パブリックコメントで多く寄せられた意見に、園内にある恐竜のコンクリート製等身大レプリカ3体をぜひ残しておいてほしいというものがありました。これは開園1周年記念に設置されたもので、当時の造園関係の方々が子供達のために、コンクリートで工夫を凝らして手作りで作った物なのだそうです。現在は、安全のために見るだけになっていますが、当時は、この



恐竜のコンクリート製レプリカ

恐竜に乗って遊べるようになっていました。その頃、動物園を訪れた人達の楽しい思い出となっているようです。

東山を再び桜の名所に

一次に植物園についてお聞かせください。温室の前の歴史庭園は、なぜイタリア風にされるのでしょうか？

パブリックコメントの質問の中にも、植物園の温室は、イギリスのキューガーデン「パームハウス」をモデルにしているようなのに、なぜイギリス式庭園ではなく、イタリア式庭園なのですかという質問がありました。

これは、名古屋市がイタリアのトリノ市と姉妹都市であり、また実は、キューガーデン「パームハウス」の前もイタリア式庭園になっているためです。

—新たに桜の回廊を作られるそうですね。

現在、当園内には、ソメイヨシノを中心に3,400本の桜が点在していますが、樹齢70年以上のものが多く、高齢で弱ってきているうえ、再生計画の中で一部は伐採されます。

それから、昔は東山が名古屋の桜の名所の3本指に入っていたのに、今はそうではなくなってしまったのが寂しい。また、桜の名所にしてくださいと、ある個人の方から3,000万円の寄付をいただきました。そんなご意見もあって、新たに桜の

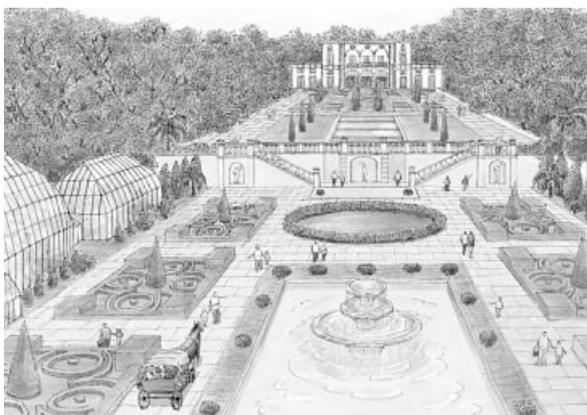
回廊を作ろうと計画しています。植物園ですから、ソメイヨシノに限らず、いろんな種類の桜を植えて、長期間、桜を楽しめるようにしようと考えています。

—星が丘地区のまちづくりと関連する21世紀空中庭園とはどのようなものですか？

空中庭園は、東山動植物園の星が丘門と、星が丘地区のまちづくりを一体化させるものです。現在、地下鉄「東山公園駅」のある正門からの入場者は45%、「星ヶ丘駅」からの星が丘門からの入場者は3.5%と、同じ公共交通の駅でありながら、利用者の数に圧倒的な差があります。

「星ヶ丘駅」から東山に向かうには、駅の近くは三越、星が丘テラスとにぎわっているのですが、途中で高校、自動車学校が入り、そこで人波が途切れてしまっています。

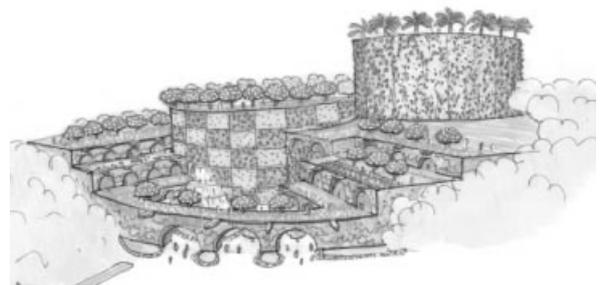
そこで、星が丘地区へ動植物園をアピールするランドマーク的なものを作って、人の流れを東山動植物園までつなげ、星ヶ丘駅からもたくさんの入場者が集まるようにしたいと考えています。ど



歴史庭園イメージ図



現在の星が丘門



21世紀空中庭園イメージ図

のようなものになるのかは、これから立ち上がる星が丘地区の活性化協議会など地元の方との議論の中で考えていきます。

周辺のまちづくりとの連携は不可欠

—周辺のまちづくりとのコミュニケーションはどのようにとっているのでしょうか？

東山動植物園は、千種区、名東区、天白区の3区にまたがっています。計画ができたときなど、節目ごとに区政協力委員長の会議などで説明を行っています。

東山動植物園に入るための地下鉄が2駅あるので、それを活かして、商店街を巡って周遊できるようにしたり、東山の森の散策路と連携したり、この周辺だけで1日過ごせるような空間にしていきたいなと思います。

—年間350万人が来るとすると周辺がかなり混雑すると思いますが、その対策はどのようにされるのでしょうか？

まず、園内に分散している駐車場を北と南に集約することで、流れをスムーズにしたいと考えています。

現在、駐車場は1,600台分ありますが、このままの車利用の比率で試算すると、計画完了時には3～4倍の駐車場が必用となります。しかし、公共交通の利用を促進するため、基本的にはこれ以上、駐車場を増やさない方向で考えています。

ただし、頑なに駐車場は作らないと決めるだけでなく、実際にうまくいくかどうか臨機応変に対応しなくてはならないと思っています。

公共交通の利用を促進するために、駐車料金を上げるとか、予約制にするとか、地下鉄、バスで来た人には、動物園や商店街でなんらかのサービスがあるようにするといった方策が必要になります。

—これからの予定についてお聞かせください。

平成28年度完成を目標にしています。開園しな

がらの工事ですから、まず動物のいない空き地に施設を作り、そこに動物を移して、もとの場所を工事するという玉突きになります。一番、効率的で、動物にストレスがかからず、お客様の安全を確保できる按配をみついているところです。また、毎年、どこか新しいゾーンがオープンするというふうにしていきたいです。詳細は、この1～2年で発表したいと考えています。